

北の鉄道風景

Train number; 2233D

2021.10.9 14:52

1/640, f/6.3, ISO 200, f=200mm(cropping)

Daylight/Sunny, 4912×7360 Raw

第126回

ニッポンの
スキです
ニチジヨウ、

かつて北海道に来ることを「渡道」と言った。明治以前は北前船、その後も青函連絡船が道外との交通手段だったから当然である。今日、航空機の発達と青函トンネルの開通で「渡道」という言葉は消え入りそうだが、現在でもフェリーは機能しているから「渡道」はできる。

日高本線、浜厚真駅も「渡道」に使える駅だ。貨車改造の駅舎にフェリー乗り場までの地図も

掲示されている。歩いたら四十分はかかりそうで、そこまでして乗り継ぐのは旅マニアくらいだろうと考えたが、タクシーの案内もあるから、もの好きなら誰でも「渡道」手段として使える。それにしてもそんな需要はあるのかと考えながらふと足元を見ると、使用済みのフェリーの乗船券が落ちていた。

若者が一人、入ってきた。外国人である。聞くとフランスからやって来たという。

「渡り鳥みたいでいいなあ、これからどうするのさ。」



日高本線と言えば前灯2灯化改造工事を施工された、いわゆる「2目C11」がトレードマークだった。1973



写真と文＝眞船直樹

「歩いてフェリー乗り場に行って今晚の便で本州に渡ります」

「そもそも、ここまでどうやって来たんだい？」

「町のバスできました」

私は驚いた。これは、日本人もしない。「日本のどこがいいの？」

「ちゃんとバスも列車も来ます。それに：」と言って、駅ノートを広げた。

「それに、こんな小さい駅でも、駅ノートがあつて、みんな、思い出書いているようだし、すばらしいイラスト、生で見れます、イラストならわかりますから」そう言つた彼は視線を天井に向け、こんな可愛いものも吊るしてある、と言いながら千羽鶴の束を揺らした。「小さなものにも気持ちを詰め込むことができる日本というところが好きなんです。世界のどこにもそんなところはありません。私の街にこんな駅があつたら、一晩で何もなくなるか、ポロポロになります」

日本の日常が好きだ。それを体験できることこそ最高のもてなしだと彼は言いたいのだろう。では、日本はそのふるさとの日常を大切にしているだろうか。私は恥ずかしい思いでキハ40のステップを踏んだ。